

植物こぼれ話

イソトマ・毒のある草花に要注意！

植村修二

●花壇の手入れ中に異変が起きた

平成23年「7月15日午後0時35分頃、兵庫県宝塚市の市立中山五月台小学校から、「児童7人が目の痛みを訴えている」と119番。7人は病院に救急搬送されたが、軽症とみられる。

同校によると、3年の児童34人が総合学習の授業で、校舎前の花壇に植えたキキョウ科のイソトマを手入れしている際、茎などから飛び散った汁が目に入ったという（読売新聞2011年7月15日）。

今回、報道されたイソトマという草花は、オーストラリア原産の *Laurentia axillaris* (Lindl.) E. Wimmer で、以前は *Isotoma axillaris* Lindl. の学名で呼ばれていたキキョウ科の植物です。大阪府の鶴見緑地で『国際花と緑の博覧会』が開催された1990年頃から急速

に普及した草花です（写真－3）。

葉の縁は深く切れ込み、夏から秋10月頃までにかけて、葉の茂みの間から長い花茎を伸ばし、花径4cmほどの青紫・ピンク・白色などの星形の花を次々と咲かせます。株がコンパクトにまとまるので、花壇やコンテナの縁取り、寄せ植えに向いています。

イソトマは原産地オーストラリアでは多年草ですが、日本では越冬させると株がどうしても弱るので、春まきの一年草として扱います。したがって、野生化することはないと思いますが、こぼれ種子で別の鉢に生えてきたのを一度だけ2010年5月に大阪市内で目撃しました（写真－4）。

イソトマは、葉を傷つけたり、茎を折った時に白い液を出します。これは有毒で、人によっては、皮膚がかぶれたりするそうです。別の報道によれ



写真－1 有毒植物のポインセチア



写真－2 有毒植物のキョウチクトウ



写真-3 イソトマの花期 観賞用に栽培される

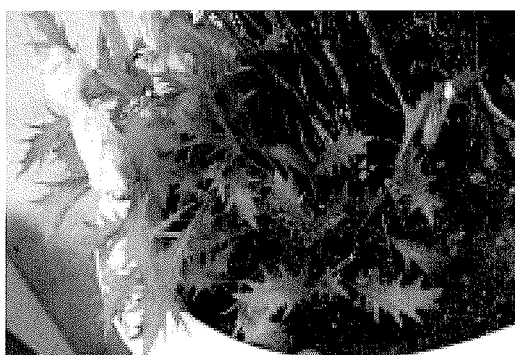
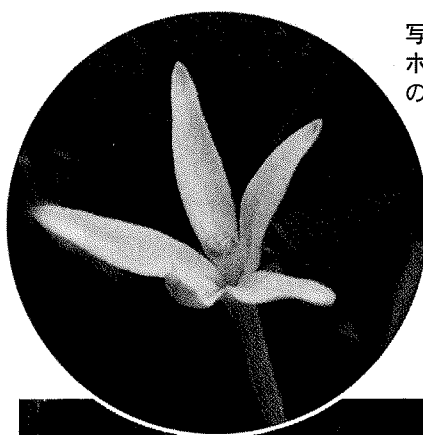


写真-4 種子からはえたイソトマ 葉の縁は深く切れ込む

写真-5
ホシアザミ
の花写真-6 ホシアザミの花期
沖縄に帰化している

ば、児童が花壇に植えたイソトマを手入れしている際、この白い液が付いた手で目を触ったのが原因とみられています。

イソトマ属にされることもある熱帯アメリカ原産のホシアザミ (*Hippobroma longiflora* (L.) G. Don) が沖縄に帰化しています (写真-5, 写真-6)。

私は、このホシアザミをインドネシアではじめて見ました。果実の着いた株を採取していたら、近くに人が集まってきて、言葉はあまり理解できなかったのですが、結果として、その株は捨てさせられました。きっと、彼らはこの植物に強い毒があるのを知っていて、「それは危険

だから採ってはダメ」とでも言っているのでしょう。そう言えば、この旅先で出会った現地のインドネシア人の何人かは、道端に生えている草について知識が豊富で、「どんな葉っぱが食べられるか」とか、「歯痛に効くのはこの草」とか、実によく知っていました。私は翌日朝早く、こっそりホシアザミの種を採りました。

植物体を傷つけると白い液が出る植物、たとえばポインセチア・キョウチクトウ (写真-1, 写真-2) のような園芸植物にも有毒な植物が多いという予備知識があれば、今回の出来事は防げたかもしれません。